

H25地域協働研究（地域提案型・前期）

RF-10「被災地の復興まちづくりにおけるユニバーサルデザインの実践について」

課題提案者：岩手県保健福祉部地域福祉課、研究代表者：社会福祉学部 教授 狩野徹
研究メンバー：齊藤明彦、中村 公一（岩手県保健福祉部地域福祉課）

<要 旨>

東日本大震災で被災した岩手県内の自治体に対し、岩手県の「ひとにやさしいまちづくり条例」対応の実態を昨年度調査した。その結果、担当者のほとんどは、ユニバーサルデザインに関する経験や知識のない一般の職員であった。本研究では、今後、復興に向けての復興のまちづくりにおいてユニバーサルデザインを実践してきた事例をまとめ、今後のまちづくりの課題と方向性を示した。

1 研究の概要（背景・目的等）

前年度の調査研究で、被災地においては、おおむね「ひとにやさしいまちづくり」は理解されていることが把握できた。沿岸では、新たなまちづくりが必要になってきているが、人材不足などのため、意識は高いが実際はなかなか実行できない状況もうかがわれた。このような状況を支援することを踏まえて、これまでに復興に向けてまちづくりを実践してきた事例から、ユニバーサルデザインの実践にむけての課題を整理することを目的とする。

ひとつの漁村全体を復興させた玄界島、再開発などさまざまなまちづくりの手法の中でユニバーサルデザインを配慮してきた神戸市の2地区（中央・灘地区、長田地区）の実践例をユニバーサルデザインの観点から評価し、課題を整理した。

これらの事例を岩手県内各地で開催したまちづくりセミナーにおいて住民や行政関係者へ報告し、意見交換した。さらに、復興後の予想される課題をまとめ、県内自治体に対して、長期的視点でのまちづくりに対する意識について調査を計画した。

2 研究の内容（方法・経過等）

1) 復興事例におけるユニバーサルデザインの実践例の事例検討

(1)玄界島

東日本大震災の被害の多くは漁村で発生している。まちづくりとして参考となる事例として福岡市の玄界島を取り上げた。傾斜地で1集落全体を復興のまちづくりをおこなった例で小規模なまちづくりの参考例である。

(2)神戸市中央・灘地区（中央区、灘区周辺）

神戸市の中心部で中央区は市役所等もあり市の中心地で灘地区は住宅が集中している地区で、神戸のにぎやかな復興がうかがえる地区である。震災記念公園や防災未来センターなど震災・復興に関する代表的な施設もある。住民によるワークショップも盛んで、三宮から復興記念公園まで「歩きにくく、見えにくい きぐるみを着ても問題なくあるいていけるまち」（ユニバーサルデザイン有識者）になっている。

(3)神戸市長田地区

小規模店舗が多い商業地区で、再開発事業で整備された地区で、被災の大きさ、復興計画の内容から全国的に注目された地区である。

2) セミナーの開催（意見交換）

県等との共同で「ひとにやさしいまちづくりセミナー」において復興のまちづくりと観光におけるユニバーサルデザインのあり方を説明し、関係者と意見交換をおこなった。

(1)盛岡会場：成26年1月16日

(2)釜石会場：平成26年1月25日

(3)奥州会場：平成26年1月28日

(4)大船渡会場：平成26年2月18日

3) 復興後を見据えた課題の整理および調査計画

以上から、これからの復興のまちづくりにおいて、ユニバーサルデザインの視点からの課題を整理し、各自治体における今後のまちづくりの対応について調査の計画をした（実施は26年度）。

3 これまで得られた主な研究の成果

1) 事例から見るユニバーサルデザイン実践と課題

(1)玄界島

斜面に集落を配置した計画である。一番海拔が低い場所に、保育園と高齢者向けデイサービスセンターが、一番高いところに小中学校が、その間に住宅地が配置されている。途中に公園やベンチなどが配置され町全体がひとつのラインで結ばれている。しかも住宅地は同じ列であれば高低差がなく移動が容易である。上下方向の移動は地理的に厳しいが、市営住宅のエレベーターを住民以外の地域住民も使えるようにした。公営住宅の設備を一般に開放する手法として参考になる。

高齢者施設と児童施設が一番下に位置しているが、利用時は必ず職員がいるので、孤立することは少ない。また、一番低いところの公民館も一時避難所になっていて、ここに集まったもの同士の「共助」で高いところへ避難するものと思われる。小さい規模であり、車での避難も可能である。



写真1 玄界島集落：一番高いところに小中学校を設け斜面を一体的にひとつの集落として復興させている。



写真2 傾斜地に集落があるので左奥にある公営住宅のエレベーターを利用してだれでも坂の上に行けるように配慮している。

(2)神戸市中心部

都市型まちづくりの復興例である。住宅とサービス提供施設が複合化され、一体化したまちづくりがおこなわれている。商業施設と住宅はこれまでも多く見られているが、特別養護老人ホームと住宅の組み合わせなどの例も見られた。小規模な施設では住宅地への設置が多くなってきているが、規模の大きい福祉施設は郊外など住宅地から離れたところへの建設が多いのが現状である。住宅地の中に設置される手法は見習いたい。坂道の高低差の利用の手法もある程度人口のある場所では参考になるものと思われる。



写真3 傾斜地の高低差を活かしたまちづくり。駅は手前の坂の上であり、下ってから建物を上ることは無いように2階にも出入口を設けている(斜面の利用)。(六甲道駅周辺から海岸方面を望む)



写真4 特別養護老人ホームの上に住宅を複合化した例

(3)神戸市長田地区

震災前は比較的小規模店舗が密集していた地区であったが、震災を期に整備された地区である。まちづくりとしては、1階に店舗が整然と並び、上層に高層の住宅が複合化されている。元からの住民は少なく、現在住んでいる住民は長田地区以外から来たものが多いという。これらの新しい住民は地元で買い物をするより、郊外型の大型店舗や三宮など比較的にぎやかなまちへ出かけて行くことが多いとのことであった。このように、まちづくりと住民の居住は一体的に進めることが重要であることが示唆されている。



写真5 駅から国道をはさんだところで商店街(低層部分)と住宅(高層部分)がある。歩道橋などで連続性を確保し、地区一体を整備している。

2) ユニバーサルデザインの視点から見た今後のまちづくりのあり方

今回調査した復興事例に見るユニバーサルデザインは良く考えられ、ワークショップなど繰り返しおこなわれ、その結果ユニバーサルデザインとしてのまちづくりは参考になるものが多かった。ただし、長田地区にあるように、「まち」と「元々の住民」がかい離した「まち」は活気がなく、「まちをつくり生活をする」のではなく「住民にあわせたまち」が重要であることが示唆された。この点で住民主体で要望をしっかりと取り入れるユニバーサルデザインのまちづくりは重要であることを確認することができた。

4 今後の具体的な展開

調査の実施まで予定していたが、計画にとどまった調査およびヒアリングの実施を行い、ユニバーサルデザインを考慮したまちづくりへのポイントを整理し、改定を控えている「ひとにやさしいまちづくり条例」にあわせて提言として結び付けて行く予定である。